（３）②様式第３号－２（報告書）

| | |
|---|---|
| NITS・教職大学院・<br>教育委員会等<br>コラボ研修プログラム<br>支援事業報告書 | 実施機関名：上越教育大学<br>連携機関名：上越市教育委員会 |
| | 事業名：【NITS・上越教育大学教職大学院コラボ研修】<br>インクルーシブな授業を支える校内支援体制づくり研修 |
| | 研修等名：【NITS・上越教育大学教職大学院コラボ研修】<br>インクルーシブな授業を支える校内支援体制づくり研修<br>特別支援教育担当者資質向上研修・養成 |
| | 開催日時：令和６年５月１３日（月）～令和７年２月１９日（水）<br>開催場所：上越教育大学（新潟県上越市山屋敷町１番地）<br>参加人数：総数８４２人（内訳：教員７４１人（小学校５５６人、中学校１４０人、高等学校５人、特別支援学校３９人、義務教育学校１人）、大学院生３８人、指導主事２０人、児童発達支援センター職員・大学教員等４３人） |

**目的：**

我々は、令和２年度から 4 年間にわたり独立行政法人教職員支援機構委嘱事業の委託を得て、各教科等と通級による指導との関連を図る教員間連携力育成のための研修に取り組み、令和５年度は、923 名の参加者があった。特別支援教育に携わる教師は増加し続け、初めて特別支援教育コーディネーターとなる教師も多い。令和６年度は、特別支援教育の理念や自立活動の意義を共有した上で、多様な実態にある児童生徒が主体的に学ぶ校内支援体制をどうつくっていくかについて、参加者が、自己の経験や自校の課題等を踏まえて考えていくための視点をもつことを目的とした。

**内容：**

年間 10 回のオンライン研修を実施した。テーマ及び講師は、以下の通りであった。

第１回　５月 13 日（月）小・中・高校における自立活動の指導の意義
　講師：上越教育大学　教授　藤井和子

第２回　６月２６日（水）自立活動を中核とした教師間連携の実践①－通級による指導を中心に－
　講師：公立小学校教諭（特別支援教育コーディネーター）

第３回　８月　９日（金）情緒的な困難を抱える子どもたちの理解と支援－子ども虐待を中心に－
　講師：椙山女学園大学　准教授　丹羽　健太郎

第４回　８月 21 日（水）交流及び共同学習における教師間連携
　講師：国立大学附属特別支援学校教諭

第５回　９月 24 日（火）自立活動を中核とした教師間連携の実践②－特別支援学級を中心に－
　講師：県立特別支援学校教諭

第６回 10 月 31 日（木）自立活動を中核とした教師間連携の実践③-コーディネーターの役割を中心に-
　講師：公立小学校教諭（特別支援教育コーディネーター）

第７回 11 月 28 日（木）校内体制の構築と関係機関との連携
　講師：公立中学校教諭（特別支援教育コーディネーター）

第８回 12 月 13 日（金）障がいのある方の就労について－新潟県における関係機関の役割と当事者インタビューから－
　講師：新潟自立活動研究会

第９回　１月 29 日（水）学習や生活に活用するための実態把握の在り方－WISC の活用－
　講師：上越教育大学　准教授　関原真紀

第 10 回２月 19 日（水）特別支援教育の視点と教科の視点から算数障害のある子が在籍する学級の算数の授業を考える
　講師：福井大学　准教授　藤岡　徹、秋田大学　講師　加藤　慎一

**成果：**

第１回から第 10 回の研修会事後アンケート結果

●選択肢によるアンケート結果

①「自身の経験や実践と研修内容を結び付けることはあったか（５たくさんあった～1 全くなかった　５件法）」について、肯定的な評価が全体の 100%であった。
　参加者は、自身の経験や実践と照らし合わせながら研修内容の理解に努めていたことが考えられた。

②「研修内容は今後の指導に役立ったか（５非常にそう思う～１全くそう思わないない　５件法）」について、肯定的な評価が 98%であった。

●自由記述による感想、意見、要望等（一部）

①実態把握と、適切な目標設定その活用において、実践しやすい方法を知ることができました。

②校内委員会のもち方の参考になりました。組織として職員の特別支援教育の研修が充実することに努力してまいりたいです。

③一人で抱え込まないことが大切であることはずっと考えていることですが、声を出しやすい職場環境を管理職を始め一人一人がつくっていくという意識が重要だろうと思いました。チームとしての学校と言われて久しいですが、本当のチームとはどういうものかを、本研修を通して改めて考えました。また、「できることをやる」ことも大切だと思いました。教員はとてもまじめで従順な方が多いのではないかと思っていますが、それ故、抱え込んでしまうというケースもあります。そうなると、バーンアウトということにつながります。先述のこととも重なりますが、個人としてはできることをやり、抱え込まず複数で、機関や校種が連携した中で子どもたちの健全な育ちや学びを支えていくことが学校には求められているのだろうと思います。本当に貴重な機会となりました。本研修を開催いただきましたことに心から御礼申し上げます。

④今、行っている自立活動の授業を見直してみようと思いました。

⑤勤務校で自立活動の授業づくりについて悩んでいましたが、今回のお話を聞いて特別支援学校の先生に相談したり一緒に授業を考えたりするのは良いことだと思いました。話を聞いて学んだことを実践でも活かしたいですし、また自立活動の研修を受けて勉強しようと思います。

⑥実践例がとても具体的で、児童の様子や先生方の関わり方がよく見えました。おかげで、自分の学校のあの子だったらと想像しながらお聞きすることができました。

⑦学校全体で特別支援教育の理念について学ぶことで、みんなが幸せな学校を作る一助となると感じました。

⑧職務を十分にこなせず、自分の力不足を痛感する毎日を過ごしてきましたが、同じような立場で悩みながらも頑張っている仲間がたくさんいることが参加人数の多さから感じられました。

⑨丁寧な実態把握にもとづく個別の指導計画の活用と校内体制の構築がとてもすばらしく、参考になりました。私は特支 Co.ですが、特学担任や通級担当にも協力してもらったり、役割分担したりなどしています。複数指名という話をお聞きし、似たようなことをしているのかなと思います。一人ではなくみんなで、それが学校全体に広がっていけるようにしていきたいと思いました。

⑩性格的に人に仕事をお願いすることが苦手で、全て背負ってしまいます。声をかけてもらうのを待たず、自分からも「こんな仕事です。お願いします。」と言えるようにならなくては、と感じました。

**「NITS からの提案（第一次）」との関連における研修担当者としての気付き**

本研修では、10 回の研修すべてにおいて、事後アンケートを実施している。事後アンケートからは、参加者が自らの実践を振り返り、研修により新たに得た知識をもとに、授業改善等に取り組もうとしていることが伺われた。「「NITS からの提案（第一次）」との関連における研修担当者としての気付き」として挙げられたことは、我々が実施した研修の妥当性を毎回のアンケートから振り返るとともに、日ごろから学校現場の先生方と対話を行い常に学校の課題を確認していくことが、研修参加者が自ら学ぶ研修を構想・実施することにつながる、ということである。次年度も、参加者にとって意義ある研修を計画・実施していきたいと考える。

**アイディアや工夫したこと：**

① 前年度のアンケート結果や学校現場の課題を各回のテーマに反映させ、現場の先生方のニーズに応じた研修を設定した。さらに、研修時間は、放課後の 15 時 45 分からの 60 分に設定した。これらの工夫を行うことによって、「毎回参加したくなるような様々な内容の研修を用意してくださり、とてもありがたいです。全部は参加出ませんでしたが、放課後で参加しやすかったです。」という感想を得ることができた。

② 新潟県内の教育委員会との連携を図り、教育委員会から各学校へ研修案内を配信していただいた。
年度当初に年間計画を配信するとともに、各回の 1 か月前に案内を配信したことにより、参加者は、多忙な中でも計画的に研修に参加することができたと考えられた。

③ 教育委員会に研修案内を配信することによって、教育委員会の指導主事や学校の管理職も研修内容を知ることができ、指導主事や管理職の参加につながったと考えられた。